

2019年度年次総会報告

2019年度の年次総会が6月8日に新宿区四谷の主婦会館プラザエフにて開催されました。11名の同窓生が出席し、総会直前に開催されたオリエンテーションに参加された新留学生の約半数の12名が参加しました。18年度の事業報告、会計報告、役員を選任、2019年度の事業計画、予算案の各議案について承認を頂きました。しかし、18年度は、6月の総会直後に、浅沼会長が急逝されたこともあり、当初の事業計画に沿って十分実施されない面があったことと、次年度の役員が会長を含め選任できず、その人数が極端に少なくなってしまうことで、近年にない特別な年度になりました。

総会に続いて、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン海外事業部部長の塩畑真里子様から「世界の緊急人道支援の現状と国際NGOの役割」について基調講演を頂き、活発な質疑応答がありました。

総会前に新留學生向けのオリエンテーションが開かれ、会場に入りきらないほどの方々が参加されました。大学と新留學生に感謝され、同窓会の活性化につながるこの行事は藤村さんが毎年音頭を取って進めてくれています。サセックスの同窓会は世界中にあっても、極めてユニークな働きだということです。

ニュースレターは前年度の勢いを保ち、内容も充実した41号から43号まで3回発行（黒田さん、加藤さん）されました。7月のサセックス・パブでは、Acer Changさんがニューロサイエンス最先端の興味深い話題を提供してくれました。また、9月には、サセックス・サロンで、黒田さんが「ホンジュラスにおける小規模企業支援プロジェクトに見る人々のエンパワーメント」という題で、現地の人達、特に女性たちの経済的な自立を助ける日本の取り組みを紹介しました。それぞれ、ニュースレター41、42号の記事を参照ください。

2019年度の事業としては、6月8日の総会の開催に続き、名簿の改訂、ニュースレターの発行、サセックス・サロンやパブの開催、新留學生のためのオリエンテーション（6月8日開催済）、留学ガイドブックの改訂、大学フェアの支援（10月、3月）、新規事業（キャリア・カウンセリング）等が提案され、名目上は承認されました。しかし役員数が少ないので、必須事業を最優先にして、徐々に協力してくれる人たちが出るのを待つ自然な成長が期待されます。

以下会計報告、役員を選任、今年度の予算案です。

II. 2018年度会計報告

収支報告書

平成30年度：平成30年4月1日～平成31年3月31日

単位：円

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
前期繰越	327,061		総会関連費	43,000	総会会場費
年会費収入	51,000	総会参加費3,000×17名分(講師からは参加費を徴収しない)	イベント費	5,000	講師懇話会費(飲食費)×イベント2回(パブ1・サロン1)
受取利息	2		コピー代	8,100	6月16日新留學生オリエンテーション配布資料
寄付	4,000	2,000(総会) 2,000(パブ)	事務用品	0	
釣銭	560	シーボニア1割値引きによる支払差額(釣銭)	葬祭費	7,938	浅沼会長死去に伴う弔電(税込)
			次期繰越金	318,585	
収入合計	382,623		支出合計	382,623	

銀行残高 (UFJサセックス大学同窓会口座) 報告

平成31年3月31日現在 ￥318,585 通帳コピー添付

III. 役員を選任

担当役員	2018年度幹事	2019年度	2019年度新幹事募集
同窓会長	浅沼健一・ (代行後藤康夫)		交渉中
総務	川幡玲子・(後藤康夫)	野田悠将	
会計	福田麻里	竹村佳子	
監査	新規		募集中
ニュースレター	黒田史穂子・ 藤村建夫・加藤珠比		募集中
イベント開催(サロン・パブ、他)	水野真鈴・後藤康夫 野田悠将	野田悠将	募集中
新留學生オリエンテーション	川幡玲子・藤村建夫	高瀬千賀子	
大学フェア支援	佐藤里香・竹村佳子	竹村佳子	募集中
ホームページ	藤森梓	藤森梓	
フェイスブック	川幡玲子	山本彩織	
キャリア・カウンセリング	新規		募集中
関西支部長	藤森梓	藤森梓	
関西支部事務局長	竹村佳子	竹村佳子	

注：藤村建夫氏は顧問

V. 2019年度予算案

2019年度 収支予算(案)			単位円		
収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
前期繰越	318,585		総会開催関連費	40,000	会場設定費
懇親会費	90,000	5000/2500参加者数	懇親会費	115,000	関西幹事東京総会参加交通費半額補助
受取利息	2		イベント開催費	50,000	サロン、パブ等
年会費	20,000	500円以上25人			
寄付	20,000				
			次期繰越金	243,587	
収入合計	448,587		支出合計	205,000	

(後藤康夫)

Alumni Now!

南スーダン難民キャンプから国連本部へ

齊藤 吉洋

Programme Analyst, Conflict Prevention, Peacebuilding
and Responsive Institution Team, Crisis Bureau,
(CPPRI)UNDP

2016-17年度IDSガバナンス専攻にて修士課程を修了した齊藤です。国際NGOの職員として、南スーダン難民支援に数年従事した経験から大学院では「紛争に陥った国の国造り」を勉強し、修士取得後の2017年10月かUNDP（国連開発計画）のアフリカ地域事務所（エチオピア）で1年半ほど、アフリカ連合や各国政府向けに国造りという観点から政策面でアドバイザー業務を行った後、昨年2月からUNDP本部（ニューヨーク）にて現在の業務についております。

現在は、本部レベルでの政策提言や紛争に陥った国々の「国造りの根幹」を支えるためのガバナンス強化のお手伝いをする仕事に従事しております。本部レベルでの仕事は各国の利害のぶつかり合いや、グローバルレベルでの政策の最新動向に触れることができ興味深く勉強させて頂いております。多様なバックグラウンドのミックスした環境の中での本部業務は刺激に溢れていますが、まだまだ交渉力や発言力という点で自分の未熟さを痛感することも少なくありません。日本人としての丁寧さ、時間を守る等、日本特有の強みも業務の中で感じることもある一方、交渉の中で発言した者勝ちといった立場に立たされる事も多くあり、良い意味で謙虚さを忘れることも重要であると思わされたり、日々学びに溢れた環境で仕事をさせてもらっていることに感謝しております。

プライベートでは、第二のライフワークとして、サッカーに力を入れています。サッカーの盛んな静岡県に生まれ幼少期からサッカー選手になることだけを夢見て高校卒業時までサッカー中心の生活を送ってきた自分にとっては、サッカーは欠かせない自身のアイデンティティの一部でもあります。



（IDS在籍時もサッカー部立ち上げをし、勉強の合間にサッカーを楽しみました）

6年程前から南スーダン難民キャンプ、イギリス大学院、エチオピア、ニューヨークと海外を転々としておりますが、どこに行ってもサッカーを通じて、例え言語が通じなくても、喜びや楽しみを分かち合えることに堪らなく感謝しております。



（UNDPサッカー部ではキャプテンとして昨年の国連リーグで準優勝）

ニューヨークでも必ずサッカーをやろうと思っていたのですが、私が赴任した当初は、UNDPにサッカー部が存在しておらず、2カ月程かけて様々な部署の人達に掛け合い、2019年6月に遂にUNDPサッカー部を発足させました。サッカー部発足当初、初試合では8-1でぼろ負けし、その後4試合負け越しが続きましたが、その後5連勝し、なんとか決勝トーナメントに進出し、準優勝するまでにチームが成長したことは本当にうれしく思います。

国連でサッカーをやることの醍醐味は、やはり様々な人種の方々が同じチームにいて、国が違えばサッカーのスタイルも異なり、とても興味深いことです。その国や地域に基づいたプレースタイル（例えば、南米出身者はテクニックが高く、個人技で局面を打開することを好むが、日本人は組織的なプレーが得意、等々）を理解し、キャプテンとして、個々の選手の良いところを引き出すことに重きを置いております。更に、普段の仕事上では中々聞けない他部署の裏話などについても、試合後の飲み会の席で聞くことができたり、ピッチ上では、年齢や等級に関わらず誰しも平等であるため、フラットなコミュニケーションが取れることも魅力の一つで、ここで得た友人とはこれからも組織や国を離れても繋がっていける関係を築けている気がします。

サッカーのフィールドで学んだコミュニケーション能力、人脈は仕事にも生きてくる部分もあると思いますし、何より私にとって非常に大事な息抜きである、サッカーを通じ、今後どこの国に赴任したとして、現地の人々とサッカーや仕事を通じて触れ合い、相互理解を促進し、友人を増やしていきたいと思っております。

Alumni Now!

小澤 絵理 (おざわ えり)

MA in Participation, Power and Social Change,
Institute of Development Studies (IDS) 2017 年修了
モザンビーク共和国在住 フリーランス研究者



サセックス大学の皆さま、こんにちは！小澤絵理と申します。皆さまと新しく繋がるチャンス！と思いこの場に投稿させていただきました。よろしくお願ひいたします。

多様な声を理解するために

開発業界に携わりたいと大学卒業後、アジア経済研究所開発スクールで約1年間基本的な開発学を学び、修了後サセックス大学では開発学の参加型コース修士課程に進みました。世界各国で豊富なキャリアを経験した同期の中で学ぶことは、授業以外からも学べることが多い一方で、経験の浅い自分に負い目を感じて過ごした一年でした。

それでも英語で開発のことを突き詰めて学べたことは、その後の自分にとってのおおきな財産となりました。

大学院で学んだこと

大学院時代は、「開発関係の仕事をする際に異なる文化・考えを持つ人々とのようにしたら理解を深めていけるのか」をクラスディスカッションを通し一年間考察したこと、また修士論文のためモザンビークでフィールド調査を行ったことが自身にとって大きな経験になりました。

クラスではリーディングから学ぶのではなく、ロールプレイングやアイデアをポストイットや工作を使い紙に表現していきビジュアル化するなどクラスメイトと行うアクティビティを通して気づくことや考えることができました。週末に開催される参加型開発の先駆者のロバートチェンバースのワークショップでも、他コースの学生たちと参加型調査の手法を体験しながら学べました。

さらに、開発業界、アフリカのどちらにもバックグラウンドがない私を一から指導し、ともに私の問題意識や興味関心を考えてくれた指導教員や、すでに行っている現地の研究の知見から様々な団体に繋いでくれた IDS の教授たちのおかげでモザンビークにおいて、修士論文のフィールド調査をやりとげることができました。IDS から偶然つながったモザンビークでしたが、結果的にわたしの現在までの

フィールドとなり、フィールド調査中に築いたネットワークは今も仕事をする上で生きています。

その後、仕事で農村部において研究を行う際には、その土地のしきたりや文化に配慮して、なるべく同じ目線で調査をする手法をとりましたが、それは大学院時代に学んだことや考えたことが大きく影響しています。

モザンビークにて

2017 年から修士論文の3か月のフィールド調査で訪れてから、明るく優しい人びとに魅了され、大学院卒業後もモザンビークで暮らしてきました。

ポルトガル語がわからないまま渡ったモザンビークでは、悔しく不甲斐ない経験もたくさんしましたが、外からでは知ることのできない現地の考えや問題を知ることになりました。経済成長をするなかで行われる開発プロジェクトの陰で恩恵を受けられずに被害を被る人々（強制退去させられた人、違法な労働基準で働かされる人）の存在に気づかされ、自身の活動もそのような現地の負の側面に光をあてるような研究になるように取り組んできました。

現地の研究所の訪問研究員として研究活動をはじめ、その後はモザンビークの NGO から委託調査を請け負ったり、農村部の業務調整の委託業務を行ったりと自分もつ経験と情報のなかで出来る事を幅広く行っています。農村部に入り量的調査だけでなく、大学院でもこだわった質的調査の両方を行うことで、彼らが直面している問題が世間で注目され、行った研究が政策提言として問題解決までつながるようなものになるよう心掛けています。

現在は、モザンビークの方と結婚し子供も授かり、この国で更なる挑戦をしている最中です。人生何が起こるかわかりませんが、この国で変化に挑戦していけることは喜びであり生き甲斐です。

サセックス大学との関係

モザンビークに渡ってから、一時期はサセックス大学のネットワークは途切れていましたが、教授からの一通のメールがきっかけで IDS のモザンビーク同窓会に参加することになりました。

保健・教育・インフラ様々な分野に携わる方とモザンビークについて議論するなどして、新たな視点が生まれ、大変助かっています。言語も知識も何もなかった大学院入学前の私から考えると大きく変化をしたなど、大学院以降の経験がとても実りのあるものだと再確認できます。

大学院時代に出会った日本人の友人とは、たまにしか会うことはできませんが、会うといまだに大学院時代の苦労話で盛り上がります。また、開発の現場の第一線で活躍する姿は私を鼓舞してくれる大切な存在です。各国で頑張るサセックス大学の日本人のコミュニティは、お互いの仕事のなかで情報交換や新たなネットワークづくりなどに役立つので感謝しています。

今後も機会があれば新たな繋がりを作っていけたらと思います。皆さま、モザンビークにお越しの際は（お越しでなくても！）、是非お声がけ下さい。

(erioz1106@gmail.com)

Golden Triangle Now!

藤村建夫

3月初めに、ミャンマー、タイ、ラオス3か国の国境にある「黄金の三角地帯」(Golden Triangle)を訪ねた。この一帯は、ミャンマーのシャン州東部に位置し、麻薬王のクンサーが勢力を誇った、麻薬生産地帯として有名である。今でも麻薬を作っているらしいが、アヘンではなく、化学製品の麻薬であるらしい。それらの麻薬はラカイン州のロヒンジャーやアラカン軍(AA)の手を経て、バングラデッシュの港から世界に運ばれているそうだ。



黄金の三角地帯—地球探検の旅より

上図黄線の三角地帯の国境は、メコン川が東岸のラオスと対岸の北側のミャンマーと南側のタイと国境となり、小さな川がミャンマーとタイとの国境となっている。ミャンマー側には建物がなく、ラオスとタイにはそれぞれホテルやパゴダなどが林立して賑やかに見えた。メコン川は清らかで時々浅瀬があり、川底が透けて見えるようなきれいな清流であったのには驚かされた。

ミャンマーの国境の町は、Tachileikでタイの町Mesaiとは巾20mほどの川にかかった3つの橋で分けられている。ミャンマー側の出国管理事務所を出て、しばらく歩くとタイの入国管理事務所がある。ここで入国票に記入して入国証のスタンプをもらおうと、検疫官が検疫書類に記入するように要求する。コロナウイルスの防疫のために、14日前には、どこにいたかを記入しないとイケない。

私たちの前に中国人の若い女性がこの書類に苦戦していた。彼女は雲南から来たのかと思われるが、英語、ミャンマー語、タイ語はまったくわからず、検疫官の女性が、ヨコ20cm、タテ2cmの三角型の紙に中国語、英語、タイ語で書類記入用の言葉を女性に示し、書類の項目のところを指で示しながら、一生懸命に記入の仕方を教えている。それでも、彼女は全然わからないらしい。私達も助けてあげようかと、思ったが、私の中国語も大したことはないので、あきらめて先に入国することにした。30分を過ぎたころ、その中国人女性も何とか、タイに入国できたようだった。

Tachileikの町は完全なバーツ圏であることがわかった。レストランや商店の価格はすべてバーツ表示であったし、人々は日常、タイ語で会話しているようだった。実はシャンはタイというのだそうで、シャン語とタイ語は兄弟のような言葉であるらしい。国境の町は意外に豊かに見えた!



ミャンマー側国境の川



ミャンマー側の市場



メコン川渡河点の検疫官



メサイのお店

メコン川のラオスへの渡河点にはコロナウイルス防止のために検疫官が配置され、女性の係官が常駐していた。ミャンマーからラオスに行く人、ラオスからミャンマーに来る人の体温検査を行っている。私も測ってもらったところ、なんと34.3度で、「問題ない!」とのこと。「ギョギョ!」そんなに低温であるはずがないと、思っていたら、友人たちもみな34度台。これでは38度の高熱の人が36度でOKになるのでは、と心配になった。ミャンマーでのコロナウイルス患者は今のところゼロなのだが。。大変心配だ!

同窓会幹事の募集

現在、同窓会会長が不在であり、会長候補者に打診中ですが、未決定です。

他方、同窓会の通常の活動を支えていくための下記の仕事の担当幹事の方々を募集していますので、ご応募いただきたく宜しくお願いいたします。

- ニュースレター
- イベント開催
- 大学フェア支援
- キャリアカウンセリング
- 監査

ご協力できる方は、総務担当の野田までお知らせください。(yusukenoda0803@gmail.com)

総務からのお知らせ

フェイスブック担当幹事の山本さんは総会後にご承諾をいただきました。また、44号のニュースレターは加藤さんのご協力をえました。